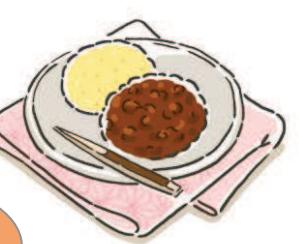


まめ知識

あずき 「小豆のちから」

十夜粥・赤飯など、仏教行事で目にするお供え物には小豆がよく使われています。赤色の粒には魔除けの効果があるといわれ、亥の子餅など仏教以外でも特別な食材として使用されます。近年、脳卒中予防への効果が期待されるなど、その豊富な栄養素からも健康によい食材の一つといわれます。かつて、貴重であった砂糖、米などと小豆を組み合わせた数々のお供え物には、ご先祖さまや阿弥陀さまへの感謝、無病息災を願う想いが込められていたのかもしれません。私たちはその想いを汲み、感謝の気持ちでお供えをしたいですね。



お経の勉強シリーズ 「日常勤行編」

この「お経」は「開經偈」と呼ばれるものです。日常勤行式の全体の中心は「念佛一会」ですが、それに次いで中心的役割を担うのが、経典の誦誦、いわゆる「誦經」です。その「誦經」に入る前にこの開經偈を唱えて「誦經」の目的を再確認します。ところで、仏教に会うことは稀有のことと述べられていますが、現在は経典を見ようと思えば簡単に見ることが出来ます。なので違和感を覚えるのではないでしょか。しかしながら、そもそも経典を理解できるのは、六道のうちの「人道」と「天道」に生まれた者だけなのです。また、仏教の広まつていらない地域に生まれたなら仏教の教えに巡り合うのは難しくなります。

三句目に「見聞」と「受持」という言葉が出て参ります。「見聞」は見聞きするのですが、「受持」は見聞きしたものを持ち記憶するという意味です。経典の内容を記憶するのが「受持」となります。

原文（開經偈）

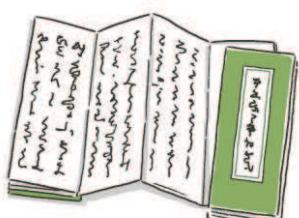
無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇
我今見聞得受持 願解如來真實義

書き下し

無上甚深微妙の法は、百千
万劫にも遭いを遇うこと難
し。我今見聞し受持するこ
とを得たり。願わくは如來
真實義を解し奉らん。

現代語訳

非常に深くて素晴らしい」とこの上なき仏教の教
えではあります、六道を輪廻する中、百千万劫と
いう長い、長い時間を経ても、逢うことは難しい。
それにもかかわらず、私は今その教えを見聞きし、
受け持つ機会を得ました。幸いにもそのような機会
を得たのですからどうか仏の説かれた真実の教え
の内容が理解できますように。



当山山門について

当山の山門は、本堂とともに建てられ、安政年間よりずっと源昌寺の象徴として、檀信徒及び寺門の歴史を見守り続けてきました。しかしながら、老朽化が進み柱や梁は朽ちており、倒壊の危険性があり、このままでは参詣者等の安全を確保出来ないため、総代会にて一旦は解体し、5～6年後の本堂・山門大修復の際に建立し、新たな象徴となるようにと考えています。



～浄土宗と三つ葉葵の紋～

浄土宗の寺院では宗紋の「月影杏葉」と共に徳川家ゆかりの紋「三つ葉葵の紋」を掲げている寺院が数多くあります。よくなぜ徳川家の「三つ葉葵の紋」があるのか質問を受けることがあります。それは、これまでの長い歴史に感謝をすると共に、これから取り組む大修復の安寧を願い、令和6年7月30日山門淨め式を執り行い、令和6年8月7日に解体をいたしました。



今から約500年前に遡ります。徳川家康公の高祖父（4代前の当主）の松平親忠公は、三河の地を統治する戦国大名になる礎を築いた方ですが、その忠親公のご子息、存牛上人が永正17年に浄土宗総本山知恩院25代目の住職となられました。江戸時代に書かれた「起立開山名前・御由緒・寺格等書記」によると、存牛上人は、法然上人の御遺跡に後白河法皇の命を受け住職に就任せしむ。松平家に生を受けその後出家し、法皇の勅許勅請を賜ることは名誉なり。我が名譽が松平家の名誉なれば、我が跡を後代に残さんため、当山（知恩院）の紋は後世に至るまで、我が元の姓の「葵紋」とすべし。と知恩院の寺紋を松平家の「葵紋」と定めたことが示されています。天下人となった家康公は、

永世当家の葵御紋を知恩院（浄土宗）の御紋とし天下安全を祈願するようにと仰せになつたと伝わっています。以来、浄土宗の各寺院に掲げられるようになつたのです。各寺院に掲げられるようになつたので